



三子のあ

茶



ありはるし

永田文庫

徳本

文庫

師の風雅万代不易者一時乃変化ありこの二ツにあり
まかすそのことハ風雅の誠不易と志すこれハ実ハ知れ
にあはれ易と云ふは新古もももは変化流弊小もかまは
殊よりよくある海之代この前人乃前と名るは代々其後
化あり又新古ももは今名る所也一是ハはるし
あはれなる易と云ふは先易と云ふは一もももは変化
まらものも自然の理あり変化ありこれハ風雅なり
次是ハ推移と云ふは一理の流弊に似たりと云ふは
てその誠と云ふはるしと云ふは心と云ふはるし其の誠乃

化を知ると申さるるなり。唯人はやうしてのこせむる
ものちその化は是とまかてく一歩自然をさせたる末
いふも変り化はるるも謀の変化は皆隙乃他諧之如皇
たも古人の延とさむるもふれ四時乃押移れくおあつた
ちの塔かくれてこそこそ皇源未だの統り門人は後乃風
雅とて小師の言此のこは出て百変百化を志す様も
世の元去まがりのこをさそむまはるのこつち中にいふこ
ともふあそくは生あつたりのたりやれは他諧いふは依に
然とわかれも云やれはるをいふ言くあつたこと
つて俗をいふるつとのまふりやるは風雅の謀とせはる

とて今も此處他諧はゆるつとさるるは風雅はつもの
ハ思ふん乃色あつたりて白雲空るものなればお自然
あつて子細なつん乃いろつりかつされはふに詞と
まじくは是もあつた謀と勤るん乃俗之謀と勤るとは風
雅は古人の心を探るとくハ師の心よく知へてはるを
あつたはたるとに謀の道がそれ心を知らハ師の謀を
の道と進ひよく又知てはるは心の節押垂し受り起て日
時をさるるにせあつたを謀と勤るといふハ師のおのり
は我らといふはなつたはして私をハ師れ乃とよろこひ
く我らの門とけとつたはるは私のとめ事あつた

門人より己と押せぬ人こそ此の招のゆへに招はぬ人作のゆへに
行はぬ人と作の海のありしも私さこそおれよといふこと
この世よりいふ事とおのうまにとりて終はるはさふく世と
云ふおは入るその微の程く情察る也句となる事これと
ゆあゝいふ事おもそのおれより自然はあは情はあゝいふ
物と我ニツはなりて其情謀はいたる私さのなるは他さ
唯作の心とまうねくさこれハそのうらゝる家心の句いとなり
稀くは詮義せさるハ採るに又私意あると人三穿穿せむ
るものハあゝくも私意はあゝるなりたかおこゝいせん穿
はくまゝいそとて用のゆへて名と比うらと云風友の中

の名目より功若は病あり師此詞ふも他措ハ之尺の意に
せよ初心の句こそたのしむれおこゝいびくまじあふし
皆功若は病とふしれい実に入は氣をきふとこははあり
氣先とこらせハ句氣よのし先師も他措ハ氣よれきて
いとおお極あゝく拍子とそこちあゝもいり業とそこ
ひこはせよい又あゝ時ハあゝ氣をたはしと句とあゝは
まといりいれ氣をきいして喜のあゝ門人功若こゝあり
てたゞ能くせんと私意とまゝ分別門は口を閉ぢり
まゝ外はあゝのうらゝる氣とあゝいふ心のおろりあゝ亦こゝ年
能措あゝ人より外は業は在りたる人々く他措牙

入るも斥のきるよりある能書ふも之を斥のきく
 業ふりいつひはき席に坐て文書と歌とるは發ふん
 こそゆり遠よ出くまよて迷ふ念ぬく文書川おろ
 せと取反故ことれひくふさく詞も阿り或時大本信
 まこと一洋本に切込まね西風ゆめ一梨子うかづま
 三十六句皆やり白歌くいろくませ先うれ侍も皆功志乃
 私書とあひやうせんとの詞之斥の心をよく執り
 つまは勤てふにのそとて業一と法さのみなうれ業す
 ともてふて出る節うあるへうは考勤てふの位とた
 業もこの勤くやいとや白と歌へ一氣とこ法してま

ら精せは別精るら細くちりてハ貴之ういと節の進む
 名のゆらく精してハ侍を大斥のこまゆく之の丈夫らふ
 云より有き一皆いきて精長るに歌う節ある一
 新ハ能譜の心こらぬハ甚なうて木立まのぬりき
 ら地せくる亡師まは新まやせらふも新との自ひ之その指
 と見えぬ人を悦て我も人もせめぬ一亦とせめて信り
 世とまハ新まが一新ハ世にせむるうゆ一歩自然
 ますむ地より歌く之名月ま替れ秀や田れくまらと云
 ハ海不易らり花うと見て綿留と阿ま一ハ新こ
 肝の白乾坤のまハ風雅のまこととら新らるりの不

夏は涼めと動ころのハ愛の時とてと先されはとほり止る
 ころハ見とめせとやると花は落葉の散れもその中よ
 して又と先せとめされハおさほるとねーその後ろおさす
 流る流るー又白作りの原の垣をとおのえとるひるをいまこ
 よさえる中についとむー二転向と白のかりは振出候と
 ころとありはその境は入とおれさめさほうらたきてひくと
 来る者く白作りなるとまると何と肉成つひに勤ておよ
 無き携ハそのれいろ白とねる肉とつね勤するものハな
 とはるありし私意よりけてまはく
 作つてく体格ハは優美にして一曲有ハ上取くたんと
 松ーき物よとらハその秋の中一取よーと多ハ地白と原の白
 とあまてそのより赤とさうう歌き

河の本の花とけあふ白ひね

は白ハ赤赤と西の何ゆのかうーはまよふとねもは
 ちちちの涙とゆくと何とをけりてまむせるをちち
 ちの月と十の月とらうーとちちね

此白と兼好有とくた人はまくれぬあがくや又とくた
 ちちの月とあるおまを余情あしてれ作ちち
 ちの月
 ちちの月と星も旅寐や思れら
 は白ハ小町と石の上は旅寐をまはハいとさびーまは

とがよしあんとららときての白なる一

かよあんたうやみ人のあやめ

は白ちほくき候たうや又月のあやえ草とらふよ
ときての白なる一

花のくこくともみほひるちたて

いすこ辨満寺のちたては降りて影流と

浸せる夕まといと凍一りれハ

夕ちしやさくりに凍む浪の舟

は白ハ古あをあせりてそふとせざる信ある一

かよよ次おま横こやよのよ

此のハとせるゆもふれとも白雲横とふ奇文を味合ふ
了いハ声や横こふとも一夢の紅は横たおやも白化人も
判さきて後江の字抜く水の上とら候けて白れ白い
一見も定る水出接天白雲横江の横白眼なる一

たもあゆみ此月かとう山のかまといとくゆの

跡もたてくしてあぬ三あまたいなる

板をさる語はあはは時早りた候着小夜中

しよてかとうく

るに無くは愛自を茶此煙

は白人の詞とまあふて風情を照さる初上服さん

こゝで、詩集は月茶の煙と香を一ひるに無てと、
と一は又句に拍子定てよか、
ちる茶や香もおとほく、
茶の煙と香

六の茶葉の香よりよつて、
茶の煙と香

綜括ふ、
茶の煙と香

は句おかしき、
茶の煙と香

は、
茶の煙と香

か、
茶の煙と香

は句ハ、
茶の煙と香

記考の、
茶の煙と香

は句の、
茶の煙と香

お、
茶の煙と香

定、
茶の煙と香

枯、
茶の煙と香

は句も、
茶の煙と香

初雪ようちきればはの雪つらさ

此夕山中に子ともと遊びてとあまある初雪の舞こも
まきさら白雪他若よよる人ー先ハ実体ハ終あつー

昔季作のくれハ風籟も師まが

は古風籟も師まがと俗とひらよまはゆる是先師の人の
人の句よ是やけてと云句まごふ懐の初雪や年ーとらふ句
ありさくいひくまふ俗之味ー

早稲の香や月け入をたあふは

一ふよハせあふ雪う香杜不二

此の句のつくる大玉よ入くをさふあつとあふはあつ

於中名ある人かへはまよりてらん世川とらふ川よふ
ありかむと云句何りたよ佳句よてもそ信を去るさふと
く有そもそのんきひとるー又不二の句も山の空を初
の舞亦もなうてハ真山とびらよかー

故も葉十の子れ宿のとあけ

はの句師のいさうたんとまてらる句にあつ候ゆとまこま
ーと詠まてまうなる句くわくわくさくの句ハ又せんハはは
と東武よ句まむく人子射てあはく梅もあふ舞ーと
まう子の宿かといひまわーてあつる一舞なり

二日おもぬらハハハハ花の集

この句ハ元日ひなまでいひてさらけひきつゝ一をきりあや
あまは白れ時肺の回ホれ氣きひるを語向とたきり
いよホ条ハ二日ホハとよよとふもとハはるこふていひて
ハあゆり字用はありにてびさくいし一とく其常 じびうりよ
あふうりの山とつふもあまんとふふとあふとハきりきり
ハ人ハつふこのおとる一

やんやぢや縁痛の田井れ岸氷

この句所のいよくたハ切りハやりける句とて昔やと
若亦たつし一とあひやりけるおとる一

と子良子の一本まう一梅の毒

此句まう一とをりやに指て老師梅の毒をきりつゝ一に子良
の彼れあつりに漸一本ある梅ありそのかにもきりつゝ
と社人のきりるをわ句とてと何れ一と原のいよ
むし一よりけ亦は連他の達人多く句をきりむし終まは
梅のことをあつとを収ハ一とす物るる風雅のいよけあり
はるそつあをきりつゝハやまかぬ亦と

とれ志良鏡も清一香の花

梅こひて卯のふおやちとさび

けきれ白ハ幾田造きれ時の嘘とこれ志良とさびとさ
をやさくち歌一と位をよくとる梅ハ香覚大頭和尙

遷化の時句こそその人を梅は結して夜は卯の花おきと
のふと梅よりてあふらとぬきそのまれば又位をふ

稲妻とよみたるやこれ紙燭の那

この句師のいづく門人この乃又あやまきあをねるまよ
ひひてきほ句こそありその何や一紙をいりんとたおかくれ
て一万余いへそあふとぬきへ

旅人この名呼まらんお一紙

は句を師武江は旅出の日此は心あつさま一紙を句乃
ゆりよりおしてあふれん初一紙とハきとこいさ海
まを歌も亦徳のうとあふよして世のうとく章さ一と

門人は送られ一風情あつものこのぬく一と他さ
よ物。際のはのちを味る一

何よけ師走の市より好馬

は句師のいづく又文字れつきこよ有とあふ

やふよま正月ハ梅のむさうり

この句ハやとくきほの初夏又正月に梅咲ることとひ
ふ一と卯月おろほとくきほの声ハと歌ふとあま一とあ
ふ

梅鯛の齒くきもさ一奥此棚

は句師のいづく心きりんと句よなつもの自費またと
隠念を生て出らん初盤とつとそらのちの折人の志ぬ

心又いづく猿の毛白く蒙の月とふハ古角と培鞠の道
くまハ赤老の下を真の棚とた言ふるも自白とらり
喜立や新年ゆり米み舞

け句作の白似合しやとほし先又文字ありは惜みく
とよりこ後ハ表立やとせりて経冊もも抄り傳る

とや成世分監するをせぬとふ

いさくらハ音又よころふところまで

本加じの身ハ竹舟は似るころふ

山語来て何やノ床しきとれきよ

家ハとふ杖よ公發のころあり

灌佛や皺手合の珠数乃音

此那分ち先ハ整分してと二字餘りの音又とら
いさおくと又文字を本枯初ハ狂句本加しとの餅
まよりきみま葉ハ初ハ何となく何やノ床しとて家ハ
一家とれとて灌仏も初ハ福を人合やとせし後
くられ傳るけ語程あるし皆原の心のうらぬ味
猿の床小も入るやきりくも

赤の白自筆に五初ハ床よ来て軒よ今やきりく
とらふ句ありなりかられ傳る

草野て若くは沙や着のらぬ

は句始ハ初とみんやとる比やとま及むるこ

風を也志と後又枕一庭の秋

此句ある事此庭をなすの句に風吹さも一ひき風さや
さもさりななく吐いていろく色といふ字もさるやうなれ
と色といふ中に先まゝと

こんやくにうらうらあふれ

この句も一先ハ恰おれと又文字を再吟して後えんや
にふり侍ると

鞍つゆは小坊ま乃や大根引

は句喉のさく此や大根引と小坊まれよく同まひさ

句佳ありと船中

六月や峯ま雲とく頂ト山

この句落折舎の句に雲並嵐山といふ句佳骨おきる
処とつり

川風やうす折若る夕涼

は句まみのつひ折少らねて侍ると

雲雀鳴中の拍子や籠子此ま

此句ひさりの鳴つける中又籠子おく鳴入るうき
をいひて昔深る味をとんといろく一そをを完

かくさけも空也の瘦もその肉

この句原のいづくの味と云とらんと数日わづらふこと
あはれとこをのちおる句と云え侍るこ

蛇ふとまけはおとあし 雑子此家

此の句原のいづくの味と云とらんと数日わづらふこと
いよきまを角う句之蛇ふとまけはおとあし 雑子此家

本のもとは汁も繪もさうさう哉

六の句此時原のいづくの味と云とらんと数日わづらふこと
ををさうとらん

たう舞そまごま餅負ふ牛此年

は句ハ西此日のうれ家且之は古辨よ人のまぬねありと

七夕や秋を言さるけいめの歌

は句此れうめけいめの秋は二よふととめておろく
まーちんて数日の後よ秋のまーめとハ家り侍るこ

丈六乃かろ縁入きり石の上

かろふより侍るのこ

は句此れ丈六乃句く人もまぬけいめやて自も再此
まて丈六のまよさるこ

明々のや白真ふさく一寸

この句ちんて言さるこ又文字あるうて言さるこ

よるさる

やうやくや猿よきやる猿の面

は葉且隙のいとく人同し処は止る河一処よしく
落入るるを悔みいひ控るると那り

牛鈴屋は蚊のあつらふき沙屋

い句蚊の声と一秋の風と笛下へは夜更けの月
こ沙屋の那とあり

梅う香よの山と日北歩る山は我

那まらち一小形きう上の籠う鴨

は二句ある他去は梅は餘き籠のつらハ沙屋と是と二句の
趣とといえんと門人のいハ師むとそくらわ侍ると

ひやくくと壁とぬきくても麻糸

是も沙屋と水の門人ハハ師写とく

帳風のたとも青一栗のいり

は句は此青とあしとく白よきとく吹ももきとく
一糸も白とハあして赤とりと

るかくく我を徒よえる友那が

七句とめハ友了かくく我と徒よえる心う那とを後あそく

全屏よ松のぬるひやあつら

は句と一巻と山を絃きく糸籠りて後あそく

秋風や桐は動くはこのあ

は句括うこく秋の終りや昔の事とてうめ八雲の侍
後とて此秋風と

園庭と川をわたり人の後

は句集ともうらなひをてみ文字して下れみ文字はむき
せうつきとてはみるこの句盤舟の後むきは像の替り

憲形り字のこころや 算

此句例明をさしやむとあぢありけし免の登白株乃
甚やと中のせあり

一一せよてなつまをてあ葉哉

は句それ素文通よびえゆるその後むよとて通はれは

原の田を此よりよくさし侍る所ありよむはらち括うと

振懐

は秋ハ何ていふもよる

此句雖波西ての句は日船よんふよと免て下れみ又
字よすこれ揚とさうれい

明月や産まらうらふ思ふ家

は句湖水の名月之名月や也遠妙の堂の縁とて
まてたうは名月や海はむらぶせ小町にもあつた
産まらうらうきとふよる

蘭の香や露の潤り美る

は句ハある茶店の片ちうに送せまふひそたきみあり
しを老翁とて知らし侍りやや、此は後一茶女料紙持出
句と形ふそ女の内うく、我ハは家内は女あり一紙今ハあ
る一は妻とてなり侍る之先のある一も老翁とてふは女を妻
と一其は難波の宗周は処よりとりまよをこけりけり句を
祢の侍りたる之例あり一此は中まてのひやくとまきりり
此そ侍れハ形とてかくて加の難波の老人の句は昔は茶
のおつこの相取の表とてつめ句とあまきりてこの句を
侍るとのありてんこそ名をこけりハかくいひ侍ると老
人の例は留るやと出捨りり此のともばされハ形とてたるとあり

秋もくやとくつと初一春の形り

は句う一先ハ形をかちよとくとはも時取哉と句作り有
いふよりのい形ハ侍りややいろく句作りしてんそと
反故の字すたてとて終る月の形と自筆の相も此一とて
良よ似ぬ貴句と出よとて様
は句と下れさういろくとて初ハ侍りて風と初とて
中ハ是初の字は位あり一とてとて完る

新あまよと種と凍一此の泥

此句と此の土とて先あり凍一とてとてはつる形
又とて佐とハ形とてこれ侍り

人夢や止道くさ秋のうら

はさやめ人あてて海の子

は二句いつれうと人あをいひはり後行人あてて
よるり所恩とよ影とつもてきり

清澁や流はちりてまき

此う免ハ大井川流はちりて一夏の月とまその女あて
ての白葉れちまにまぢううとてわううられはる

板の本に藤あてたる藤の心

これ白ういふはつるやとまううれに包ち申う一まあてて
さうう一登はれいさううああ起ちまてまてとていふ

旅は病て夏ハ枯野とくけい

此句病中の吐みて白れ終り之程うけいさる夏とていふは
まいさよひはつるやと人あもいひさ後け句に定るとは枯
花よま角うかけらかま路を迫る夏もとせやとる
と河屋後日記は程うけいさる

朝はさ浅路春あはの原

は句も春とて一原の詞もあふれと難の句にもあり
きう一季とてありあひせあ枕を用る十七文字にハうう
うー連かてとていふもはるさ乃らよてふ句もあ
る、程杖つき坂の句も

門人の句に元日や家中の礼ハ星月秋のよきた門
松又星月秋と斗はる句の味あへりて

日松風は新酒と燈は山語哉といふ句を山語と夜をた
まへりてその秋の道乃度りに集むるにみ出さし時を
ちり先の山語あへりて

日花雪の雲は意くやいらのちりといふ句を人の心るを
せかへりてやゆの句よかへりては句あへりてかへりて
師の句いれりれ句にて志る一とてそののちを何と
やかへりてと亦をを宜とけは秋のちハあへりてかへり
もも心男麻のつらねは初庵茶いつら君うたふらた人とい

もその秋はやとけはれもあへりてはかへりてはかへり
とたり

日松ハかりくも人玉の妻といふ句をこれハ玉の字を別
ありかへりも無念なる句とて法句のひ歌へりて句とて
同ややそれゆへり時あはさる一とてあへりては初又理
をへりて一とて後詠は月といひてと云ハ宜とて

同村なるが旅客と笠の塔あさんとといふ句あり初の河
るより松とと斗はる一とて

日雪は梅は花のちりてはかへりてはかへりてはかへり
手解よくてはかへりてはかへりてはかへりてはかへり

ともなふなりと

日暮風や春の中は水の音とつふ句あり、京氣此句なり、
京氣ハ大予の物之連ぶナ京曲といひつゆ一の京近づく
ほくしと一代一ま句よふと初めよふたあよふし一先たり
此ハ連ぶちとハハ半段ある京氣の句ハ端々ひやきとて
決ゆくいましめ有くは暮風京曲すことてかけらふとて
の系にといふ協して送れはるとく、亦ハ京曲ハ足振折は
属すと空家々ものやわく、宿蓮の意而、空軒の、空の
綱代本、是は折折の意と有る、此ハあり

昨の句、此借之連ぶ、亦ハよく付せし字意、心致、後
乃於後おも、亦句に心のかよ、さるハ、たむ、一、起人のつら
くさうら起てた、ひみする、折る、一、と、有る、此ハ、又付の、
ハ、亦、万化、と、一、とも、せん、長、而、此、付、と、ひ、形、一、京氣、は
之ハ、鬼り、侍る、より、一、昨の、句、とも、も、又、ある、時、昨の、詞、ハ、折る
さ、ゆ、く、ま、と、一、世、上、二、三、折、と、は、今、ら、あ、而、十、二、折、と、
ん、く、侍る、之、相、おも、ま、あ、ん、や、此、後、う、に、究、め、侍る、や、う、に、人、と、に
あ、ん、ん、あ、り、控、ハ、ま、あ、る、あ、も、つ、と、す、と、て、や、ま、侍る、
昨の、句、付、と、一、句、ハ、句、答、付、移り、推、量、た、と、一、形、あ、り、起
る、亦、と、あ、り、通、せ、し、れ、ハ、及、う、と、起、亦、あ、り、昨の、句、と、ひ、く、を、
の、あ、り、ま、と、一、つ、

あはくして来る海なり野分ふら那

子孫はかしくらをおく粟の穂

若き羽もくつくろりぬおーし

一吹風の木の葉を吹りまほ

は揚二ハお及付一体の句之露の句ハ種分治しくあはぬ
おさゆりく後をつら句を重なる体と揚と以木の葉を
はら句のあをよ句と揚と一何し一葉葉を以し油を
後乃喜れと一こと又とくお句のあをよをよとくものに
くしれ句と

き菊の隣もありやつけ大板

あはくして来る海なり野分

は揚同一家の句を重し付る之内と外の揚子之候の字有る句

あはくして来る海なり野分

あはくして来る海なり野分

は揚名取とく付る句之ハお彼を越る風流と句と一なる

秋の音の先くははるる那

萩子一萩より萩又萩より

は揚お句はら末を重し付る句なり

葉程子、庭の端や夕涼

葉あかりあはくするのそ那

は獨爰句此位を足あめてもなかく付る句この日お裁
そあつりの似合あおと奇

そあつりた旅寐よ帳屋と忌を戸

古人うやうれ秋の末かろ

は獨風のさひし秋夜古へうの夜あるとつとふ句
こ付らハその旅寐ふ言く足る心をいふ付る句こ

おくそこもねくて冬木の梢が

小喜よ首の動くこのむ

この獨あつりねる日れその世たつりわりの貌よ宗
悦のいろを足るるをさつきを付る句こ

市中のおの句ひや夜の目

あつりくと門くねる

は獨白ひや夜の月とを足込く極異と群く
足込の心を照さ

い話くの急もまきさるる

ふれて蝶乃目をさるる

此揚らほさうハとふら乃句にちねりに蝶のち
まにち揚らひ入るりたを付る句こ

おくや夏戸よさるる萩の声

おふり取よおぬね松む

この扱最句の位と云ひ志めて自よ偽しくもあつた句

緑の草履乃ちあゑある妻

石ゆへにおそね小館とあり分て

此句と氣を付と云へ一句床友の巻の借と云へ云へと
云へ云へ

夕魚おそく、貧居ひーる

樵の本とせと云へ此ハ外に藤人

一句付とも古代ゆしてま自ハ美葉ふとの借あり

道の紫は涇埋く面白や

改くうらなると門の半付

これ一句強者の借と云へ此はくさしを云と云へ
意の移と云へ

龜山やありしの山やこの山や

る上は碎くかくえくれつ

お句のやの字書きともに碎てそと云へる新と借
新は一句風狂人の借と

野 松は樹の啼くさるあや

歩けりあおむりれ人と啼くと

お句は字と云へるあといひと云へるひと云へる勢ひを
云へ入くくさる急くなり人のゆりふかくはる白い

青天より有明月の影はけ

湖水の秋のは良はる川

あふれ初より雪より成記し湖水の秋は良はる

雪と清く冷しく大なる風景を寄

僧や多く寺り歸る

猿川の猿と世と終る秋の月

六の二句よりなる格之人の五格と一句として世の

あつさ海を付とけ

こころと草鞋をゆる身夜は

春をゆりしよ起るる秋

こころとあふ初は秋の文と淋しむ格と見込人二病

を秋をよめるものとあひなれて妹ふとら麻笠とて起

るきは別人を多く見込心と二句はるに歌まを

秋もたたくとくも持のえ

灯の影跡しき申付る

あふれ並の字の気味よせむ秋麻衣衛一るれ住居

との五斤付て掃清めする所と見込よひしき申付

の跡を付るる跡の字ひらりあり

ほよらけりる路るる人

又六の目を認ませるるり

意味の句は終日双六はまきる情はくほよけぬ
さ人の氣情を付くる人

そのと取けたほの音中

藤正も孝れも寐て居ぬ音は

お向うそつとくふ所に又込く音うし祇る群しての
志の心通取出したる上戸のおうし情を付くる句

煉掃のたをたふた出

むくひれくと中取りたり

推量れ句にみせりし中におませくうしつこの
ある事とはまきりして中取りたりとありさぬを付くる人

冬空はあれは成る山嵐

旅乃馳走り有ゆり

馳走の字さむき阿基よぬると心の志のりに馳走
のさむを付てあむ

けりむく脱は録るもは乃約

摩耶う高根よ雲のかくれ

まへ句のま約よさむかけたる人の舞まやうしつこの後
つとて雲のかくれるとさむかけてお向にいひつけて付くる句

歌よせある村松乃ま

有明のなりお鳥帽子さるり

か句の夕をうけて其句れ移ひと移りて付する句と

身元と川起されて恥しき

髪あふる羅の衣

か句れ移すの移りといふ付する句はま女の所より

牡丹ありくはこり

耳とく妹又告る部一

いとく付する句と

あはれ風れ海をこはる浪の音

一たりさや白子つら松

か句の心の移りをして気色よ歌し付する句

龜乃あまれ此撫るとは先

華本はまうぬ生て歳るあり

あ句に言かよ候る白かのみす及くまうぬ小歳る

華本とあれる宿を付する句

能く乃七尾乃色ハ位る也

奥の背志りくるとは老を見て

か句れ不し位をえ込はとあるまきとさひおしと人

の所を付する句

中くは上向まをりれハ番は

わら名を里はあふりぬ

川一付折こ

抱込く松山廣き者なり

あふ人毎よ奥くささなり

川一付之奥村あるは地と見込る所といふ人
耕よさひ形して付折是く

口又人通る傍を果え

菊は所の子才の枕古能

あふ此を通る耕中内の耕ゆく付るは
今令此位と云ふ一、奈良の多みいつけなり一付るこ

川一付上下の流れ廣く

獲よ杖さけ宿乃氣遠い

あふを氣遠い物ひたりは詞と云
形一付るこ
流の字ぬくはゆめ

川一付此里よりしてハ候くみ

ぬつと管よりあふ出

はもあまつくさるを並よるもあふ
付るこ
あひ形するはさけはもあふ

隣へもあふさけ嫁をつきて

屏風乃陰よるは菓子

川一付之を此川目よ立候あふもあふ

ふのたふし新あり

入込は流砂の涌湯の夕まられ

中ふもせふれさういふゆ

あふふはまりて付る句こそ中れを月まて
いふる句なり

人妻の仲よの何とぞ中ん

嵐と舟とささるあふさ

この句も一巻ハ流ノの嵐舟舟ささるるとせいのふ
られ侍るよあふのあふといふ字差合て付るゆ
るく曉の字骨おあま人のいもく次ノの嵐新とさ

に侍るも舟ささるをといひてハ下の七ちよおふ
くといふ原まで直といふ

扱の本加うし此豆加うを吹

多き炉に位持をひとり扱む

いふもあハ位持さゆくと取く後淋の字陰ハ

相の本さく月さゆり

門志免てたまふて森る面白さ

この事先師のいもくまを依ハ門志免ての二句り扱を
まへより扱方門人あといハ皆位するのひそくんあ
しあさ芽生といふ句よよれま老師のあふあ非

さぬかたの時五よき此也

火をうりきよき冬のうらひす

一年は仕る事^みまよおさまりて

けみんらちのあまれ句に十余句并けりかてわ
まよせしれしとこ

市人よいそ是うらん吾は笠

酒の戸たたく鞆のうれ梅

朝うけり先より母衣を引つて

け分三ハ門人杜園う句にけ分三せんといふ
出傳るし原のひそくけ分三の附くあまし

鞆ふてほなをたたくといふものハ風狂の待人たたくは
さもあまし枯梅の風儀よあひ入るハ武者のあま
分三あるうらむとこ

あけあまの杖つぎ坂を落るが

角はとかりぬ牛もあましの

此句多門人土芳う句に先師は句を風らけり季
形一皆揃しそるうらむとあけあまのくさぬくつけて見
けれもあましのうらむとあけあまの句をえんをけれよ
けしそてそその伝えてけりけ傳る原のふまあま

